

<書評Ⅱ>

遠藤 環著

『都市を生きる人々—バンコク・都市下層民のリスク対応—』

(京都大学学術出版会 2011年)

岩佐 和幸

世界の都市人口が農村人口を凌駕し、今世紀は「都市の時代」といわれる中、途上国のメガシティに注目が集まっている。途上国ではグローバル化や構造調整政策を背景に空前のペースで都市化が進行する一方、都市内部で雇用や住宅、共同生活条件の不足が極限に達し、スラム人口が10億人に及ぶ等「貧困の都市化」の様相を呈しているからである。こうしたメガシティの先端事例が、タイの首都バンコクである。バンコクは、圧縮された工業化や金融自由化を背景に多国籍資本の結節点へと変貌を遂げる反面、1997年の経済危機や2011年の大洪水、都市下層社会の肥大化といった脆弱性や社会的不平等を内包する都市として知られている。また、クロントイ地区を筆頭に、市内のスラムはNGOによる支援活動や小説・映画の舞台に選ばれることが多く、日本の一般市民にもなじみ深い都市である。本書は、このバンコクで日々暮らす都市下層民に焦点を当て、彼らの居住と職業をめぐる構造と動態を、リスク対応という視座から切り込んだ作品である。著者は新進気鋭のタイ研究者であり、現地での精力的なフィールドワークに基づく最新のバンコク分析である。最初に、本書の内容を概観しておこう。

冒頭、本書の原点となる問題意識が披露される。都市下層民は、コミュニティの火災による消失やスラムクリアランス、工場労働のレイオフといった様々なリスクに晒されている。著者がこのことを実感した出来事が、調査先で起きた大火災への遭遇であった。この事件を契機に、不安定性を内包する下層民にとって、都市で生き抜く重要な鍵はリスク対応能力であることが中心軸に据えられることになる。こうした強い問題意識を踏まえ、第1章では課題と分析視角が示される。ここでは、既存の理論や政策が都市下層民の貧困を一律かつ固定的に捉える外在的アプローチであると批判した上で、彼らの労働と生活のダイナミズムを内在的に検討し、リスク対応というレンズを通して階層性を解明するという課題が提示される。あわせて、個人・世帯・コミュニティを生存戦略の場・単位と捉えたリスク対応や、ライフコース、職業移動と階層性という分析視角が設定される。

第2章は、現状分析の前提作業として、バンコクの都市貧困政策をトレースしている。ここでは、都市発展に伴いスラムとインフォーマル経済が成長する中、住宅中

心のスラム対策から生計の場としてのインフォーマルセクター支援へと政策が次第にシフトし、その延長線上に1990年代の「成長」と「福祉」の両立支援策、2000年代のコミュニティ開発と制度外経済支援策が展開されたと整理する。これに対して、著者は、フォーマル化指向の施策ゆえに貧困層の実態とは乖離したものであり、タクシン政権下の施策も目的と実態にズレがみられる等、批判的に評価している。

では、都市下層民の実態はどのようなになっているのか。それが、第3章以降のテーマである。まず、2003年から行われた調査の概要が、第3章で述べられる。ここでは、都心密集と郊外拡散が進むバンコクのスラムで、下層民の居住と職業をめぐる葛藤を意識しつつ、都心と元郊外の2つの地区を調査対象に選定した著者の狙いが示されるとともに、各地区の歴史的形成過程や現在の生活状況等が描写される。

こうした実態調査に基づく職業と居住の構造分析が、第4・5章である。職業・階層分析からは、中心的な職業種の抽出に加えて、地域的差異や都市再編に伴う職業構成の変化が浮き彫りにされるとともに、雇われか否かと生産性の高低を軸にした職業分類の再構成を通じて、下層民の2つの職業選択基準（安定性と自立性）が導出される。また、居住については、都市定着層の同居原理と居住変化を追跡した結果、ライフサイクルと予算制約の下で住宅更新がなされる「プロセスとしての住宅」という特徴と安価な賃貸市場の発達を示され、コミュニティは変化する住宅の集積空間であるという主張がなされる。

以上の構造分析を踏まえ、第6章以降は都市下層民のリスク対応過程へ重心を移していく。まず、第6・7章のテーマは、火災に遭遇した都心コミュニティの居住・職業変化である。居住面の変化では、所得低下の中で借金や貯蓄取り崩しを通じて生活再建を図る様子や、近隣での仮設住宅等の確保、住宅更新に伴う転出・売買状況が示される。と同時に、集合アパートかセルフヘルプ住宅かという住宅再建をめぐる分裂に着目し、その差異は生活様式や職業形態にも起因すること、そこから生産・消費・生活空間としてのコミュニティの複合機能を浮かび上がらせている。また、職業面の変化では、生産手段を喪失した自営業者の再建過程に焦点を絞り、再投資や職業移動で対応する悪戦苦闘ぶりや、自営業から一層不安定なインフォーマル労働への流動化が述べられる。

一方、工場閉鎖・レイオフという別のリスク対応を検討しているのが、第8章である。ここでは、ライフコース分析を基に、元郊外コミュニティの女性労働者がインフォーマル経済に参入する過程を検討し、職業選択における世帯戦略の規定性や、夫妻間の世帯内役割と家計支出負担の不均衡、コミュニティ内での競争激化を明らかにしている。

さらに、第9章では、7・8章を踏まえて、都市下層民

の職業世界における「上昇」経路が検討されている。開発経済学で想定されるインフォーマルからフォーマルへの上昇イメージとは異なり、実際には安定性・自立性基準が重視され、意外にも雑貨屋を最終ゴールと見なすインフォーマル経済内部での「上昇」イメージを析出している。

最後の「おわりに」では、都市下層の上層に限定される従来の支援政策の限界や、下層内部でのリスク対応の階層性、不安定性を吸収する世帯戦略とコミュニティの役割、階層性・ジェンダー格差・コミュニティ機能に留意した政策的含意が総括されている。

以上からも分かるように、本書はまさに「都市を生きる人々」からアプローチした研究であり、アジアの都市研究者にとって豊富な知見をもたらしている。とりわけ大きな功績は、貧困層の職業・生活世界に分け入ることで、先行研究や政策の限界を克服しようとした点である。しかも、質問紙調査やインタビュー調査、参与観察、経営調査、家計簿調査等の多彩な方法を駆使して複雑な現実を解き明かしていく過程は圧巻である。一連の調査結果を基に、都市下層民の階層性やリスク対応での生存戦略、個人・世帯・コミュニティとの相互関係といった新たな事実を浮かび上がらせた本書は、従来の静態的貧困論に対して、下層民のダイナミズムを捉えた動態的階層論と特徴づけることができよう。

もう 1 つの功績は、ジェンダーへの注目である。本書では、タイの労働集約型製造業やスラムの現実を直視することで、職業や世帯内役割での男女格差やリスク遭遇後の女性の不利性を明らかにしている。特に 8 章では、家計補助的労働という通説を批判し、女性が家事・育児負担に加えて家計の主軸を担うことが実証されており、男性世帯主分析に終始してきた都市下層社会分析において新境地を切り開いている。

加えて、本書には調査風景を記した写真やコラムが随所に盛り込まれ、専門書の枠にとどまらない興味深い作品になっている。その意味で、アジアの都市に関心を持つ者にとっての必読文献になることは間違いないだろう。

その上で、残された課題を指摘しておきたい。第 1 に、インフォーマル経済の枠組についてである。本書では、雇われか否かと所得・生産性の 2 軸で職業を 4 分類し、被雇用職種はフォーマル、自営業はインフォーマルと整理しているが(図 7-1、9-1・2・3)、被雇用職種には日雇や清掃労働等のインフォーマル職種も含まれており、4 分類でフォーマル／インフォーマルを当てはめるには無理があろう。また、被雇用(低)の女性工場労働は、雇

用の不安定性やインフォーマル経済との高流動性を考慮すれば、むしろインフォーマルに含める方が妥当であるように思われる。豊富な調査結果とカステル等の議論を踏まえたインフォーマル経済論の新たな展開が望まれる。

第 2 に、都市下層民に影響を及ぼすバンコク経済との関連についてである。本書は、ミクロとマクロの相互作用が強調されているものの、本書でいうマクロが世界経済から国民経済、地域経済までを含む曖昧な範疇であることに加え、収録内容はミクロな都市下層民分析に絞られるため、マクロな都市経済の姿は十分解明されたとはいえない。都市を生きる下層民は、仕事や居住場所を自由に選択しているわけではない。分析の柱である職業と居住との関連でいえば、都心の業務空間化や郊外の工場再編等に伴う地域労働市場の変動であったり、スラムに押し込まれる土地・住宅市場の動向に大きく規定される。したがって、下層民の営みを明らかにするには、人々の営み(ミクロ)の内部分析だけでは限界があり、都市構造を前提にすることによってはじめて、都市を土台で支える人々の営みや社会的不平等を鮮明に描写することができるのではないだろうか。

最後に、マクロとミクロの間に位置するコミュニティの意義についてである。本書では詳細な観察によりコミュニティの複合的機能が指摘される一方、コミュニティを維持・再生産する住民組織や住民間協力の分析が希薄であり、セルフヘルプ住宅建設をめぐる組織的取組は補論的位置づけである。ソーシャルキャピタル論等の「安上がりの」コミュニティ開発に対する著者の批判は理解できるが、住民組織がなければ、リスク対応はリソースの多寡に規定された個人の自己責任に帰着することになる。ミクロの生存戦略の限界を克服するには、住民自身でコミュニティのあり方を模索し、政府に権利要求していくメゾレベルの住民組織が不可欠であり、ここからマクロ構造の変革に向けた展望へとつながっていくように思われる。

以上より、本書は都市という厳しい現実を生きるミクロな主体をリアルに描き出すことに成功した反面、マクロやメゾといった都市を生きる人々をとりまくバンコクの全体像については、依然不明のままである。本書の中には、こうした課題にまつわる分析の萌芽がちりばめられていることから、近いうちに著者は我々の期待に応えてくれることだろう。

(高知大学人文学部)